グラウンデッド・セオリーの方法論について

伊　賀　光　屋

P.Baert (2003) は，プラグマティスの公分母となっている考え方は道具主義（知識は行為の継続を妨げる問題を解決するための道具であるという主張）の採用と，知識の目撃者理論（知識は可能な限り正確に外界の内的性格を表現するものであるべきだという説）の否定，そして反超越論的探究様式（先験的で無時間的な基礎，すなわち直観，内省，理性などによる探究を批判し，探求者は歴史的・文化的に特殊な視点から免れ得ないことを主張する）の採用であると言っている。

一方，プラグマティズムには知を実用性から判断するという以外に共通点はないという考え方もある。たとえば，A.Lovejoy (1963) はプラグマティズムが13種類に分類できると言い，F.C.S.Schiller (1912) はプラグマティズムはプラグマティストの数だけあると言ったという。また，J.Lewis & R.Smith (1980) らは，プラグマティズムにはパースやミードの社会実在論（社会は実在する）とジェームス，デューイの社会名目論（実在するのは社会を構成する個人だけである）があるとしている。

これらの当否をここで問題にするつもりはない。学説史的にはそれぞれの論者の説の違いや，同じ論者の説の展開を論じることは意味があるだろうが，ここではそうしたことには関心がない。ここではむしろ，グラウンデッド・セオリー (GT) の方法論が，プラグマティズムやシンボリック・インターアクショニズムから何を受け継いでいると言えるのかに関心がある。そのことが明らかになれば，GT 方法論の現今の対立や分裂をどのように整理し，収拾していくべきかの道筋が見えて来るであろう。

A.Bryant & K.Charmaz (2007) は「人々が日常の行為の中で，自らの現実を構成する」という P.Berger & T.Luckman (1966) や H.Garfinkel (1967) の構築主義的な考え方が，1960年代のアメリカ社会学の認識論的転換を象徴するもので，こうした実証主義への異議はすでに，A.Strauss らの経験的研究の中で示されていたという。たとえば，A.Strauss (1959) では，「分類は対象の中にあるのではなく，対象は何らかの視点によって分類される」とされ，A.Strauss et al. (1963) では，病院組織は交渉によって決められた秩序であるといわれた。ところが，B.Glaser & A.Strauss (1967) では，グレイザーの影響により，理論の真実性 (veracity) は単に「データ」に訴求するだけで明らかにしうるとか，「現実は発見され，探究され，理解されうる」とか，「単一であり，知ることができ，発見されるのを待っている実在」という素朴実在論的実証主義の考え方が見られるとする。

しかし，私は，Glaser & Strauss (1967) を他の Strauss の著作とことさら異なる立場だとする考え方は正しくないと思う。

A.Bryant & K.Charmaz (2007) は，プラグマティズムの基本的立場である，パースペクティヴァル実在論の意味を理解しそこなっていると思う。パースペクティヴァル実在論では，自存的 (intransitive) なもの自体とか本質とか事実とか様々に言われる実在そのものの存在を否定しているのではなく，それについての人間の認識や行為が実践される世界すなわち現実の意存的 (transitive) な性格を，パースペクティヴの多様性とか，多元的宇宙と表現しているのである。構築主義者はプラグマティストや批判的実在論者の存在論での自存的実在と認識論での意存的現実との区別を理解できず，「現実は実在するのか，それとも構築されたものか」という陳腐な問を発し，古い実在論 vs. 観念論の枠組みから抜け出られずにいる。パースペクティヴァル実在論の立場からすれば，「実在は自存的に存在し，現実は意存的に構築される」ことになる。

2008．5．7　受理

J.Strübing（2007）はGT方法論の創始者の一人であるA.Straussがプラグマティズムとシンボリック・インターアクショニズムの伝統を受け継いでいることを強調し，特に

① G.H.Meadの相互作用する諸パースペクティヴとしての客観的実在と言う考え方
② J.Deweyの問題解決過程の相互作用的・循環的な理解の仕方
③ C.S.Peirceの問題解決における新しいアイデア創出を説明するためのアブダクションの推論の重視

の三点がストラウスの著作には一貫して見られるとした。Strauss（1987）やStrauss & Corbin（1994）そしてCorbin & Strauss（1990）にはプラグマティズムの伝統が色濃く残されていること，Glaser & Strauss（1967）は客観主義とプラグマティズムが混在していること，Glaser（1992）ははっきりとコロンビア学派の影響が現れていることを指摘している。Strauss & Corbin（1994）は方法論的議論をせずに技術的手続きの展開に明け暮れているために客観主義的アプローチと誤解されているが，その底流にはプラグマティズムの方法論が存在すると主張する。そして，構築主義の特徴の中でプラグマティズムにないものは名目論であるが，CharmazやBryantの構築主義GTの重要な考え方は全て，プラグマティズムの中に既に確立されてきたものだと主張する。先の①，②，③についてはその通りであると思うが，私はプラグマティズムの実在論と構築主義の名目論を和解することは容易ではないと考えている。

本稿では，GT方法論がプラグマティズムから受け継いでいるのは存在論におけるパースペクティヴァル実在論とそこから必然的に帰結される認識論における可謬論的相対主義であり，シンボリック・インターアクショニズムから受け継いでいるのは解釈主義的方法論であることを論証したい。

自らは構築主義者である，Guba & Lincoln（1994）は，現代社会科学の探究パラダイムには，①実証主義，②ポスト実証主義，③批判理論，④構築主義の四つがあり，それぞれ，次のような問に対する答えによって区別されると主張する。

存在論的問：実在の形式や性質はどのようなものか。実在について知りうることは何か。

認識論的問：知る人と知られるものとの関係の性格はどのようなものか。

方法論的問：知られうるものは，どのような取り組み方によって知られうるか。

彼らは，表1のように四つの探究パラダイムの基本的性格を纏めている。そして，Glaser & Strauss（1967）やStrauss & Corbin（1990）のGTをポスト実証主義に位置づけている。私はこの位置づけは正しいと思う。

これを承けて，M.Annells（1991）はGTの古典的様式としてGlaser & Strauss（1967）やGlaser（1992）

表1　四つのパラダイム

事　項	実証主義	ポスト実証主義	批判理論	構成主義
存在論	素朴実在論 実在の現実	批判的実在論 実在の現実 蓋然的に知りうる	歴史的実在論 社会的，政治的，文化的，経済的，民族的，ジェンダー的価値によって形成される実質的現実	相対主義 局地的で特殊に構築された現実
認識論	二元論・客観主義，真理の発見	修正された二元論・客観主義，蓋然的真理の発見	交流的・主観的価値に媒介された発見	交流的・主観的創造された発見
方法論	実験的・操作的，仮説検証，量的方法	修正された実験的・操作的仮説の反証，質的方法も含む	対話的・弁証法的	対話的・弁証法的

を挙げ，GT の発展的様式として Strauss & Corbin (1990，1994) を挙げている。そして，古典的様式がポスト実証主義（批判的実在論，客観主義的認識論，立証主義），発展的様式が構築主義（相対主義的実在論，主観主義的認識論，構成主義的方法論）に依拠していると言っている。

しかし，Guba & Lincoln (1994) の認識論的問は，本来存在論的問に含むべきもので，認識論的問とは言い難い。ここでは，戸田山（2005）に従って，存在論では独立性テーゼに賛成か否か，認識論では知識テーゼに賛成か否かを問うのが適切であると考える。戸田山の独立性テーゼとは，人間の認識活動とは独立に世界の存在と秩序を認める考え方である，知識テーゼとは科学（ここでは探究）によって世界とその秩序について知りうるということを認める考え方だとされる（p.148）。この独立性テーゼに賛成か否か，知識テーゼに賛成か否かで見て，戸田山（2005）は独立性テーゼと知識テーゼを共に認める科学的実在論，独立性テーゼは認めるが知識テーゼを認めない反実在論 (B.C.Van　Fraassen らの構成的経験主義など），知識テーゼは認めるが独立性テーゼを認めない観念論 (B.Latour & S.Woolgar らの社会構築主義など）を区別している。J.D.Raskin (2002) や Chiari & Nuzzo (1990) の説をこの戸田山の分類に当て嵌めると表２のように，①には実証主義が，②には認識論的構成主義 (Von Glaserfeld や Kelly) や限定的実在論 (Ellis や Beck) が，③には解釈学的構築主義 (Gergen や Maturana) が入ることになる。

表２　独立性テーゼと知識テーゼからみた諸パラダイム

		知識テーゼ	
		肯定	否定
独立性テーゼ	肯定	実証主義	認識論的構成主義 (Von Glaserfeld, Kelly) 限定的実在論 (Ellis, Beck) ポスト実証主義
	否定	解釈学的構築主義 社会構築主義 (Gergen, Maturana)	

プラグマティズムや批判的実在論は，いずれも独立性テーゼに賛成（実在論）で，知識テーゼに反対（可謬論）であって，いわゆるパースペクティヴァル実在論と言える。すなわち，実在そのものは認識主体から独立して存在しているが，実在についての知識や表象は認識主体のパースペクティヴに依存しているので，実在についての正当な代替的パースペクティヴは複数存在するという多元論の立場に立っている。両者を区別するのは方法論である。批判的実在論は実在そのものに近づいていくことに関心があるので，超越論的演繹という説明の方法を採用する。それに対して，プラグマティズムはむしろ知識や表象に関心があるので，アブダクションや分析的帰納といった解釈の方法を採用して共同体が制定する，あるいは交渉して決める真理に迫ろうとする。

ただし，批判的実在論者である，M.S.Archer (1995) は，相互決定論 (co-determinism：構造⇔エイジェンシー）の立場から，次のようにパースペクティヴィズムを批判している。

「私の原理主義的な主張は，存在論，方法論，そして実践的社会理論の間に一貫性をもたさなければ，全体論と個人主義との間の理論的泥沼を抜け出せないというものだ。・・・ある人々は，実践的社会理論をその土台から引き離して，パースペクティヴの配列を調べ，こうしてあらゆる世界の最良のものを獲得するための折衷主義的なパラダイムを提唱しようと試みている。同時に，このような『パースペクティヴィズム』は，理論的多様性には確実な基礎的理由があるのだということを否定し，道具主義を経由して首尾一貫しない諸前提との結合へと滑り込んでいる。」（訳書：７頁）

本稿の第一の目的は，存在論におけるパースペクティヴァル実在論，認識論における可謬論，方法論における解釈の方法の三点セットこそGT がプラグマティズムやシンボリック・インターアクショニズムから受け継いだパラダイム的特徴であることを明らかにすることである。第二の目的は，そうした立場に立つと，GT の具体的手続きはどのように組み立てられるのかを明らかにすることである。

Ⅰ　プラグマティズムの基本的スタンス

(1)　パースペクティヴァル実在論

パースペクティヴァル実在論の立場は，W.James (1967) の根本的経験論・自然的実在論の中に鮮明に示されている。

「わたしは自分の世界観に『根本的経験論』という名前をつける。・・・経験論は，説明の強調点を部分，要素，個体の方におき，全体を一つの集合として，普遍的なものを一つの抽象物として扱う傾向をもっている。・・・
経験論が根本的であるためには，その理論的構成において，直接的に経験されないいかなる要素も認めてはならず，また直接的に経験されるいかなる要素も排除してはならない。このような哲学にとっては，経験どうしを結びつける関係はそれ自体が経験される関係であり，経験されるいかなる種類の関係も，他のすべてのものと同様に，その体系において『実在的なもの』として数えられなければならない。・・・
根本的経験論は・・・自然的実在論に近いものである。・・・
異なった精神どうしが同一の対象を共有するという常識的な考え方には，それに固有のいかなる特別な論理的，認識論的困難もありはしない。・・・あなたとわたしとが『同じ』メモリアル・ホールを認識しているというとき，われわれの精神が数的に同一の知覚経験へと終着し，そこに終着しているかどうかは・・・経験的な事実の問題である・・・
そして，明らかにわれわれの精神が同一の対象に終着していないのは端的な事実である。色覚異常などの可能性を別にしても，われわれはメモリアル・ホールを別々のパースペクティヴから見ている。あなたはホールの一方の側におり，わたしは別の側にいるかもしれない。・・・それでは自然的実在論は・・・経験的事実によって論駁されるということになるのだろうか。われわれの精神は結局のところ何一つ共通のものをもたないのであろうか。
そうではない。われわれの精神は間違いなく空間を共有している。われわれはプラグマティズムの原理に従うかぎり，はっきりと特定できる相違を見出さないものについては同一であるといわなければならない。」（伊藤邦武編訳「純粋経験の哲学」48～89頁）

G.H.Mead (1938) もパースペクティヴァル実在論の立場を鮮明に打ち出している。

「パースペクティヴは客観的存在をもっている・・・。この命題を逆に表現すれば，パースペクティヴは主観的ではないと言うことだ。いいかえると，知覚的世界は常に存在し，それはそれ自体一つのパースペクティヴであって，その内部で主観が生じると言うことだ。主観と客体との間の論理的区分は，このパースペクティヴの内部にある。主観とは，客体の実在が，少なくともなんらかの点で将来どうなるか不確実な時に，その客体の代わりをする個人の中の経験のことだ。・・・その個人に属しているものは，彼の世界に属しているものと同じ客観的実在を有している。それは単にそこに存在している。彼に属しているものはほとんど彼のみが接近できるが，彼の世界は彼のパースペクティヴの中に存在している他者たちにも接近しうるという事実から，彼の有機体の経験が主観的になることはない。・・・パースペクティヴは個人と関係のある世界であり，世界と関係のある個人である。」(G.H.Mead, 1938：114～115)

この点について，J.Martin (2006) は次のように敷衍している。

「(ミードにとって，パースペクティヴとは) 世界内の人間の行いによって生じ，常にそれと関係づけられている，より大きな文脈内での方向付けである。・・・パースペクティヴは環境内での行為と結びつけられる，環境への方向付けである。パースペクティヴは活動から現れ，ますます複雑となり，分化し，抽象的となる様々な形態の活動を可

能にしていく。人間の世界は社会的世界であるので，すべてのパースペクティヴは対人的相互行為の中で生じ，用いられる。パースペクティヴは個人によって想像力豊かに練り上げられ，内省的に研ぎ澄まされるかもしれないが，もともと他者たちとの相互行為の中で生まれ育ったものだ。このように言うことは，人間の相互行為を可能とするとともに制約もする生物物理学的世界が存在しないということではない。生物物理学的諸条件は，精神や自己のような社会・心理学的現象を発達させ機能させるようなパースペクティヴにとって，必要だが十分ではないということを単に認めるだけだ。ミードにとって，パースペクティヴの取得の問題は，なによりも我々が自分たちの世界や自己を理解するのに用いる認識論の問題ではない。むしろ，それは存在論の問題である。我々は，生まれてからこの方，埋め込まれている社会文化的世界の中に存在するパースペクティヴを取得することで，自己解釈的な存在者として存在することが出来るのだ。」(J.Martin, 2006:67)

このように，**パースペクティヴァル実在論 (perspectival realism)** の基本的立場は，我々すべての人間の社会文化的世界や心理学的世界は実在しているが，それらは我々の視点に依存しているという考え方である。言い換えれば，存在論における実在論と認識論における相対主義を和解させる考え方であるといって良い。

この，パースペクティヴァル実在論の考え方では，社会とは，個々人のパースペクティヴズが組織化されたものであり，これこそが社会学の対象とされたのである。そして，ミードは次のように言う。

「社会が生じ，社会的事実が科学的探求の対象となるのは，個人が彼自身のパースペクティヴにおいて行為するだけでなく，まさに他者たちのパースペクティヴ，特に集団のパースペクティヴにおいて行為する限りにおいてのみなのである。」(A.J.Reck (ed.) 1964:310，訳書99～100頁)

そして，実験的方法とは，個人のパースペクティヴを最も普遍的なコミュニティのパースペクティヴにするためのテクニックであり，

「客観的データは，諸個人たちが，その経験のなかでコミュニティの態度を取る，つまり，その経験のなかで彼らがコミュニティの他のメンバーのパースペクティヴの中に入る経験である。」(A.J.Reck (ed.) 1964:310，訳書100頁)

といっている。

ある行為者が何かを現実的だと考えるとき，それは自らが属しているコミュニティ全体にとって現実的であると考えているのである。このように，人々が解決すべき問題に直面してそれを知ろうとしている時に，個々人としてではなく，共同体の一員として携わっているのである。現実性は共同体を前提としている。(C.S.Peirce，1955:247)。だから，事物の実在性は共同体のパースペクティヴによって現実味を帯びるのである。

(2) 可謬論的相対主義

G.H.Mead は「19世紀の思想運動」(1936) の中で，相対主義の視点が形成されてきた背景について次のように述べている。

「ロマン主義観念論や合理主義が試みたのは，思考を世界の発見者として提示することだった。この試みは事物の本質が何であるのかを見出すという際立った仕事をするものだった。・・・知識は単に，世界の本質の獲得である。・・・」(G.H.Mead，1936，訳書360頁)

ところが，真理＝実在を反映した知識，という古典力学とそれに対応した実証主義が相対性理論や不確定性理論によって批判されるようになって，素朴実在論に代わるべき存在論や認識論が必要になってきた。こうして，一方で批判的実在論が，他方でプラグマティズムが生まれたのだという。

ミードはホワイトヘッドやラッセルを念頭に置いて実在論を次のように捉えている。実在論では，知識とは精神と対象との間の関係だと想定する。そして，分析的方法を用いて，対象をすべてその要素に分解し，

次に精神とそれらの要素及び要素間の関係との間に認知関係を措定し，最後にそれらを総て一緒に結びつける。実在論者によれば，事物は存在する。少なくとも存在性を持つ。すなわち，ある地点，そしてある時間に位置づけられる。われわれが，それについて考えるものは何であれ，存在性をもつ。そして，これらの存在の要素間の関係を決定することが，我々の課題であると考える。これらの要素間の関係もまた現実として与えられている，と言うのだ。

しかし，こうした実在論の立場に立てば，可謬性の問題や普遍の存立の問題が解けなくなる。実在論者が主張するように，知識が精神（主観）と対象（客体）との関係の中に既に与えられているならば，すなわち，知ることが意識の中にある対象を，意識の外にある対象に関係づけることであるとするならば，誤謬が存在する余地はない。しかし人間の知識は可謬的である。

また，普遍は個物と異なり，精神の中にあって精神の外部に実在することはほとんどない。しかし，実在論的観点からすれば，我々が思考する限り，普遍も外界にある何かと対応していなければならないことになる。普遍や本質といったものは必ずしも実在しないのであるから，精神の中にはあるが外的対象に結びつけられずに知ることは出来ないことになる。実在しないにもかかわらず，我々がそれについて考えるものの多くは「存立」と呼び，そうした実在していない存在者を我々は措定する必要がある。ここでも，実在論と本質を繋ぐために，認識論のレベルで**可謬論 (fallibilism)** が不可欠となる。

また絶対的観念論の失敗に対して，それを乗り超えるための戦略として「パースペクティヴの客観性」を唱え，ホワイトヘッドから**諸パースペクティヴの組織化**という考え方を援用した。すなわち，「一群の諸出来事を，それらの出来事についての様々なパースペクティヴが組織化されたものとして捉える」**規約主義・多元論的相対主義**の立場を採用した。

「事実はそこにあって拾い上げられてくるものではない。それは切り出してこなければならず，デ－タは最も抽象が困難である。」(G.H.Mead, 1938:98)

「ある事実が本来，何であるかは単にそれかそれ自体何であるかに依存するだけでなく，観察者にも依存する。」(G.H.Mead, 1929:428)

D.N.Shalin (1991) が言うように，プラグマティストの論理は，物自体の同一性は創発的であることを認め，知る人こそが，その用語的枠組みによって，物自体の不確定性を終結させ，事物の絶え間ない変化それ自体を，合理的で論理的な状況に変換させると考えるものだ。誰から見ても分かる実在が我々の様々な論理的鋳型に完全に適合することはなく，それを捉えようと工夫された分類境界から溢れ出てしまうことに気づいている。

「事物の根本的混沌状態に確定性をもたらすのは主体である。個々人が不確実な世界を法則の世界へと，実践的。理論的に変えることで，秩序づけられた宇宙が達成されると考えている。」(D.N.Shalin, 1991:230)

(3) 実践的解釈

D.N.Shalin(1991)が明らかにしているように，プラグマティズムでは，

「我々は大理石の塊を受け取り，自ら像を彫る。・・・他の彫刻家たちは同じ石から他の像を彫り出すだろう。・・・私の世界は・・・何万もの世界のうちの一つにすぎない。」(W.James, 1967:161;1980:289)

として，現実を客観的で意味のあるものとして生産する中で人間が果たしている役割を強調する。また，インターアクショニズムでは，社会を人間によって持続的に産み出され浮上してくる生成的プロセスとして捉える。このように，プラグマティズムとインターアクショニズムに共通する基本的考え方は，機械論的世界観を否定し，人間を世界の能動的制作者として捉える**人間主義的世界観**であるという。

G.H.Mead (1936) は，プラグマティズムの基本的立場を，真理をその実用性から判断する実用主義，知

識を行為と関係づける実践主義，知識は環境をコントロールするための道具であるとする道具主義の三つであるとしている。

「(ウィリアム・ジェームズとジョン・デューイの) 両者の仕事の背景には，観念や仮説の真理を，その実際の働きによって検証するという共通の前提がある。」(訳書，389頁)

「プラグマティズムは・・・知識の過程を行為の内側に引き戻す。・・・知ることは，適応の過程である。認知とは有機体が環境に対して選択的態度をとり，それに基づいて再適応することである。」(訳書，396頁)

「プラグマティズムは，選択及びその発展である内的思考が，我々にもたらすのは我々が必要とする道具であると考える。すなわち，知識とは，道具や手段を獲得する過程である。」(訳書，397頁)

また，D.N.Shalin (1991) はプラグマティズムの実践知の考え方を強調して次のように言う。

「プラグマティズムによれば，心の世界と物質の世界とを繋ぐ不可欠の環は行為であるとされる。人々は事物を測り，捉え，知るためには，それに向かって行為しなければならない。人間の行為は，一方で本来的に個人とその他の事物とを結びつける出来事であるが，他方でまた，特定の一行為者の独特の視点の中で世界を編成する意識という事実でもある。それ故に，行為は心と物質という二つの分離した領域を架橋する以上のものであり，具体的，実践的に両者を結びつける統一体である。」(D.N.Shalin, 1991:227)

実践的に解決しなければならない問題が存在する場合に，その解決という探究プロセス（問題解決行為）のなかで，思考と事物が統一されていくと考えられているのだ。

II　シンボリック・インターアクショニズムの探究方法

(1) シンボリック・インターアクション

シンボリック・インターアクションは解釈と定義を生み出す進行的な過程である。そして，解釈とは他者の行為や言及の意味を確定することであり，定義とは自分がどう行為しようとしているのかに関する指示を他者に伝達することだとH.Blumer (1969) は言う。そして，この解釈や定義は相互行為の中で繰り返し行われる。

「すでに成立している集団生活のパターンというものは単にそれだけで持続しているのではなく，何度も繰り返されるその確認という定義づけによって，持続性を保証されているのだ。・・・集団生活の流れの中には，参加者がお互いの行為を再定義している無数の時点が存在する。・・・再定義という行為は，人間の相互作用に形成的な性質を与え，いろいろな時点で，新たな対象，新たな認識，新たな関係，そして新たな型の行動を生じさせるものなのである。・・・シンボリックな相互行為によって人間集団はひとつの発達した過程になる。」(訳書86頁)

人々はシンボリック・インターアクションの過程において，互いに相手の行為に対して単純に反応しているのではなく，相手の行為の解釈や自らの行為の定義づけにおいて与えられた意味を媒介して相互行為が行われる。人間の相互行為が解釈過程を含み，相互に行為の意味了解が可能となるにはシンボル体系の共有が前提となる。こうした意味の共同体の外部にある調査者が人々の行為やその意味を理解するには，彼らのシンボル体系に精通し，イーミックな理解ができるようになる必要がある。シンボリック・インターアクショニズムではどのような方法論に基づいて，人々のシンボル体系に精通しようとしたのだろうか。

J.D.Lewis (1976) は，ブルーマーをミードの継承者ではなくデューイの主観的名目論に基づく観念論者だと考えている。またC.McPhail & C.Rexroat (1976) は，ブルーマーを実在論と観念論の間を揺れ動く折衷主義者だと考えている。しかし彼らのブルーマー批判にもかかわらず，私はブルーマーがミードのパー

スペクティヴァル実在論と相対主義の立場を堅持していたと考えている。

(2) ブルーマーの存在論

そこで，まず彼の存在論に関する主張を見てみよう。ブルーマーはミードの考え方を次の四点に纏める (H. Blumer, 1980)。

① 人間に対して見下ろすように立ちはだかり，それに対抗して行為することが出来ないような実在の世界が誰にも分かるように存在する。
② この実在世界は人間によって知覚される形式においてのみ知られる。
③ したがって，実在は人間がそれについて新しい知覚を発展させるに連れて変化する。
④ 実在の世界を知覚することに対する実在的世界の抵抗が，その知覚の妥当性を検証する。そして，

「この教義は，観念論の立場に反対して，人間によって全く知覚されない，あるいは不正確にしか知覚されないかも知れない，実在の世界が誰にも分かるように存在していることを表明している。また，この教義は実在論者の立場に反対して，実在の世界は本質的で，固定的な組み立てをもつものではなく，それについて人間が知覚を構成し直すにつれて変化しうることを表明している」(H. Blumer, 1980:410)

と述べてる。このパースペクティヴァル実在論の考え方は *Symbolic Interactionism* の中で既に繰り返し表明されている。

「シンボリック・インターアクショニズムは哲学学説ではなく，経験的な社会科学のパースペクティヴである。・・・すなわち人間集団と人間行為に関する検証可能な知識を生み出すことを目的とするアプローチである。」(H. Blumer, 1969　訳書27頁)

「経験科学にとっての『現実』(reality) とは，経験的世界においてのみ存在するものであり，そこにおいてのみ，探究され，検証されうるものである。」(同上28頁)

そして一方で，観念論では「経験的世界は人間にとって心象またはその認識との関連においてしか存在しえない」とされるが，ブルーマーはこれは正しいと考えた。しかし，「したがって，現実もまた，経験的世界とは独立に心象や認識の中において探究されるべきである」という点については，ブルーマーは反経験論的な独我論として退けた。

他方で，実在論では「経験的世界は実在の性質を持つ」とされるが，ブルーマーはこれは正しいと考える。しかし，「経験的世界の実在性は固定的で不変」だとされる。ブルーマーはこれは誤りで，実在性は「いま，ここ」のうちに現れ，新しい発見により，絶えず作りなおされると考えるべきだという。そして，実在論では「社会諸科学の経験的世界の実在性は自然科学の方法によって捉えうるし，捉えるべきだ」とされる点について，ブルーマーは誤りだと考える。そして，それぞれの経験的世界のそれぞれの頑固な性質に応じて，個々の経験科学は独自の方法論をもたなければならないと論じる。ここで**頑固な性質 (obdurate character)** とは，我々の心象や認識に対して抵抗する（すなわちそれでは正しく捉えられないことが露見する）経験的世界が示す現実の証のことである。

(3) ブルーマーの認識論

次に，認識論レベルの議論を見ていこう。

α　まず，意味の起源については**構築主義**と類似した議論を展開する。すなわち，

「意味の起源には二つの伝統的説明がある。その一つは意味を，その意味を持つものごとに内在的なもので，そのものごとの客観的な構成の自然的な部分をなしているものとみなす。・・・意味は単に，その意味をもった客観的なものごとを観察することで，そこから取り出されればよいということになる。・・・この見解は，哲学における伝統

的な『実在論』の立場を反映している。・・・

もうひとつの伝統的見解では，意味はある個人にとってものごとがその意味を持つような特定の個人によって，そのものごとに心理的に付加されたものとみなされる。この心理的付加物は，その個人の心，精神または心理的構成の構成要素が表現されたものであるとされる・・・。」(1969，訳書4～5頁)

シンボリック相互作用論では，意味の起源についてそれらと異なる見解を持っている。

「この立場では，**意味**は人々の**相互作用**の過程で生じたものと考える。ある個人にとって，ものごとの意味とは，そのものごとに関して，他者がその個人に対して行為する，その行為の様式の中から生じてくるものである。他者の行為が，その個人にとってものごとを定義するように作用するのである。・・・意味は社会的な産物と考えられる。」(1969，訳書5～7頁)

β　次に，対象についての議論では，**相対主義**の立場がはっきりと見て取れる。

「人間は，ひとつの世界の中に，つまりもろもろの対象からなる環境の中に生きている。そして人間の活動は，こうした諸対象をめぐって形成される。・・・ミードのいう対象とは，人間による構成物のことなのであり，内在的な本質を持って自存する実体などではなかった。・・・対象の性質は，それに向きあう人間の志向や行為に依存して決まる。ミードにとって，対象とは指示されたり言及されたりするあらゆるものごとのことだ。」(1969，訳書87～88頁アンダーライン部分は筆者が訳し変えている)

このように，対象とは，

① 個人に対して持つ意味によって構成される。
② 対象の意味は，対象に内在するのではなく，個人がその対象に対して，いかに行為しようとしているかによって決まる。
③ 対象は，社会的相互作用で起こる定義の過程から形成され，変容されると言う意味で，社会的産物である。
④ 人間は，対象に対して行為するための準備が出来ている。
⑤ 対象とは単に反応を生む刺激ではなく，解釈に基づいて，それに対してどのように行為するか指示されたものごとである。

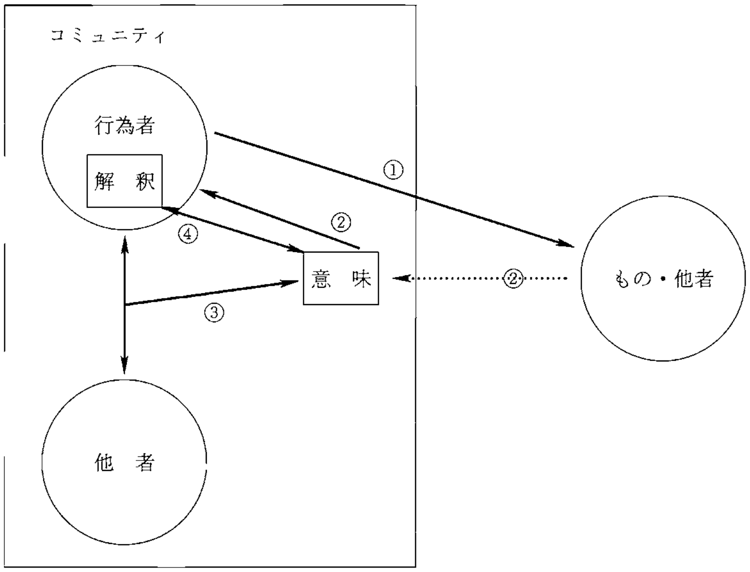
とされる。そして，

「人間は意味にみちた各種の対象からなる世界の中に生きている。この世界は，その内部での社会的相互作用を通して意味が織り上げられるという意味で社会的産物である。・・・こうしてさまざまな集団がさまざまな世界を発達させる。」(1969，訳書89頁)

というように，諸対象からなる世界は探究者たる人々のコミュニティによって意味づけられるという。ここで言う探究者のコミュニティとはE.Wenger (1998) の実践の共同体に他ならない。

このように，ブルーマーの立場は，経験的世界の実在性（戸田山2005の独立性テーゼ）を認め，経験科学が誤りうることを認める（戸田山の知識テーゼを認めない）立場であり，観念論と実在論の間で煮え切らないどっちつかずの立場を採っているものではない。この立場はポスト実証主義の批判的実在論に近い立場であり，後で論じるD.L.Rennie（1998；2000；2006）の方法的解釈学でも評価された存在論における実在論と認識論における相対主義を結合させた立場であり，ミードの**パースペクティヴァル実在論**そのものと言えよう。以上の議論を，シンボリック・インターアクショニズムの三つの前提とかみ合わせて見たものが図1である。三つの前提とは，意味に基づく行為，意味の社会的構築，意味の解釈による修正である。

① **意味に基づく行為**；人間は自らの環境内の物理的なものや他の人々，制度，理念，他者の活動，出来事などのものごとに対して，それらが自分に対して持つ意味に基づいて行為する。（パースペクティ



①	行為→もの	パースペクティヴァル実在論（実在するものの不確定な意味は行為者の働きかけや視点で定まる）
②	もの→意味	相対主義（ものの意味はシンボル体系を共有する探求者のコミュニティによって制定される）
③	相互行為→意味	構築主義との共通点（ただし構築主義はものの実在を認めない）
④	内省→意味	構成主義との共通点（ただし構成主義はものの実在を認めない）

図１　シンボリック・インターアクショニズムの三つの前提

ヴァル実在論）

② **意味の社会的構築**；これらの意味は（物事に内在したり，行為者が心理的に構成したりするのではなく），社会的相互行為（コミュニケーション）の中で生み出される。（社会構築主義と共通する考え方）

③ **意味の解釈による修正**；これらの意味は解釈過程を通して確立され，修正される（行為者は相互行為の中で構築された意味を，自分の行為の中で単に適用するのでなく，自らの解釈過程を通して，意味の選択，検討，保留，見直し，変形などを行いながら用いる）。（構成主義と共通する考え方）

J.Martin (2006) によれば，ミードのパースペクティヴァル実在論や自己と社会の弁証法という考え方は，実在論と相対主義を和解させるだけでなく，極端な構成主義と極端な社会構築主義の双方を避け，（社会構造の）内面化と（エイジェンシーの）主体的行動の双方を取り込むための装置として役立つのだという。このことは，ブルーマーのシンボリック・インターアクショニズムの三つの仮定にも当てはまるといえよう。

⑷ ブルーマーの方法論

しかし，方法論のレベルでは，**イーミックな観点**と**参与観察の方法**を強調し解釈主義の立場に立つので，説明の方法を重視する批判的実在論とは似ても似つかぬ研究スタイルとなる。

「ある集団の活動を理解するためには，その集団がどんな世界を持っているのかを特定化しなければならない。この作業は，**対象が集団成員に対して持つ意味**という見地から行わなければならない。」(1969，訳書89頁)

「行為の研究は，行為者の立場から行われなくてなならない。こういというものは，行為者が知覚を解釈しそして判断したものの中から，行為者によって作り上げられる。だから，そこで起きている状況を，行為者がそれを見るように見なくてはならない。行為者と同じように対象を知覚し，行為者にとっての対象の意味に即して，その対象の意味を特定化し，行為者のやり方に則して，その行動の方向を追跡しなくてはならない。要約すれば，**行為者の役割を取得し，その世界をその立場から見なくてはならない。**」(1969，訳書95頁)

「シンボリック相互作用論の立場から要請されるのは，人々がそれを通して行為を構成する解釈過程を把握するということである。・・・この過程を把握するためには，研究者は自分が**研究している活動単位の役割を取得しなくてはならない**。・・・活動単位の役割を取得せずに，いうところの『客観的』観察者の超然とした姿勢で，解釈の過程を把握しようとすることは，最悪の主観主義におちいる危険をおかすこになる。」(1969，訳書111頁)

こうしたパースペクティヴァル実在論の立場に立って，探査と精査の方法を提唱する。探査(exploration)と精査(inspection)とは，経験的社会的世界の直接的な自然主義的探究方法の二つの構成部分と考えられている。

α　探査（データの収集と記述）

探査の目的は，①馴染んでいない未知の社会的領域に密接かつ包括的に精通すること，と②研究上の問，探究の方向，データ，分析的関係，解釈などをその経験的社会的世界から離れないようにしておくことだとされる。研究の焦点は初めは広く，次第に絞って鋭くしていく。様々な手法，例えば，観察，面接，会話の聞き取り，ライフヒストリーの収集，書簡や日記の利用，公的記録の検討，フォーカス・グループ・インタビューの実施などを必要に応じて柔軟に使用するとされる。ここでは，質的データの収集技法が挙げられていることに注目しなければならない。そして，このような方法を用いて，可能な限り，包括的で正確な像を描き出すとされる。これはいわゆるエスノグラフィーの方法であり，記述を目指した作業と言うことになる。

β　精査（データの分析と理論化）

精査の目的は，研究上の問を理論的な形式に変換し，一般的な関係を探り出し，概念の指示対象を明確にし，理論的命題を立てることだとされるが，そのために，いわゆる科学的分析の手法（定義的概念とその操作化，データの数量化と数量的解析，演繹的・法則定立的説明など）を用いるのではないとされる。しかし，具体的な分析方法は提示されず，分析的要素（カテゴリー項目）をその要素を包摂している経験的実例の注意深く，柔軟な吟味によって細かく入念に検討するとされる。この精査の考え方が，GTではコーディングの手続きと絶えざる比較法や分析的帰納の推論形式を用いて，理論を浮上させる方法として結実し，ルーチン化していくことになる。

III　初期GTの方法論

B.G.Glaser & A.L.Strauss (1967) は質的データの分析アプローチとして，次の四つのタイプを区別している。

① まずデータをコード化し，ついでそれを分析する方法（これはいわゆる**テンプレート分析**にあたる）
② 新しいカテゴリーやその特性，そして仮説を産出する目的でデータを調べる方法（これは**仮説発見法**といえよう）。
③ **絶えざる比較法**。ここではコード化と分析が同時に行われる（これはいわゆる**編集整理法**にあたる）。この場合には対象となる現象に関連して収集された総てのデータが分析される。
④ **分析的帰納法**。あらゆる入手可能なデータを用いて限られた数の仮説を検証する方法で，この場合，

データは対象となる現象に関する事例に限られる。しかも明確に定義され，注意深く選定された多くの事例から成っている。そして，仮説を反証する事例が見つかれば，仮説を再定式化するか，現象を定義し直すかされる。

そして，彼らが採用する，**絶えざる比較法**は後のオープン・コーディング，軸足コーディング，選択的コーディングへと展開されるものである。絶えざる比較法は次の四つのステップから成るという。

① 各カテゴリーに当て嵌まる諸事例を比較する段階

データを読み，新しいカテゴリーが浮上してくる度に，また既に浮上しているカテゴリーに当て嵌まる出来事が見られる度に，コード化を行う。そして，その出来事を同じカテゴリーのもとにコード化されている複数の過去の出来事と比較する。これは後のオープン・コーディングに対応する段階である。

「絶えざる比較法を行うと，非常に早い時点でカテゴリーの理論的諸特性が生み出される。たとえば，問題のカテゴリーを類型や連続体として捉えた場合に，その類型や連続体がカバーする範囲，カテゴリーの次元や特性，カテゴリーを際だたせたり目立たなくさせる条件，主な帰結，他のカテゴリーとの関係などが明らかになる。」（1967，訳書151頁）

そして，コード化を進める中で，分析者が自分の思考の中に浮かび上がってきた強調点の間に対立や葛藤を感じたら，コード化を中止して，自分自身のアイデアについてメモを書き留める。

この段階では，一つの出来事に一つのカテゴリーを当て嵌めることを原則とし，複数の異なったカテゴリー特性のために何度も同じ具体例を使いがちになる傾向を是正する。

② 複数のカテゴリーとそれらの諸特性を統合する段階

第一ステップの出来事どうしの絶えざる比較の作業から，出来事とカテゴリー（特性）との比較や，カテゴリー同士の比較へと移り，複数のカテゴリーが，生き生きとした結びつきをもって現れてくるようにする。これは後の軸足コーディングの段階に対応する。

③ 理論の及ぶ範囲を限定する段階

③－① 理論の範囲の限定

絶えざる比較法をカテゴリー間で進めていくと，理論が次第に固まっていき，相互に関連するカテゴリーと圧縮によって構成された主要な輪郭をもった全体とへ統合されていく。この段階では，①や②のステップで産み出された諸カテゴリー群や諸特性群の根底にある同形性を発見し，より高次のレベルで，よりわずかな概念群で理論の定式化を行う。後に用いられる表現で言い換えれば，中心的カテゴリーの発見とそれらとサブカテゴリーとの関連づけがこの段階で行われる。つまり，この段階は後の選択的コーディングに相当する。そして，この段階で，理論に使う用語や理論として提示するものの範囲の限定付けが行われる。ここから，一方で変数と理論定式の簡素化が，他方で理論を適用しうることが可能な領域の拡大化が確保される。

③－② コード・リストの圧縮

理論が成長し，その圧縮が進むとともに，コード・リストも項目数も減らし，分析が選択的で焦点の定まったものになっていく。一方で，カテゴリーが理論的に飽和していくために，収集し分析するデータが増えていっても，カテゴリー・リストは増加しなくなっていく。そうした状態が生まれれば，理論ははっきりと浮上したものとなる。

④ 理論を各段階

コード化が進んだデータと一連のメモが準備され，一つの領域について実質的理論が打ち立てられれば，その理論を書き上げ，研究成果を公表する。

Ⅳ Strauss & Corbin の展開：(A.Strauss & J.Corbin, 1994；1998)

(1) Strauss & Corbin の存在論と認識論 (A.Strauss & J.Corbin, 1994)

K.P.Addelson (1990) はシンボリック・インターアクショニズムの形而上学（存在論）について次のように言っている。

「シンボリック・インターアクショニズムの形而上学についての私の理解は次のようなものだ。真理は発見されるのではなく，制定されるのだ。制定された真理は何らかの権威付けが必要である。人々は様々な仕方で真理を制定する。彼らに関心のある哲学者や社会学者は真理がどのように制定されるのか説明出来なければならない。シンボリック・インターアクショニストたちはそれを説明する仕方を持っている。しかし，人々について研究するときに，哲学者も社会学者もやはり真理を制定する。彼らがどのようにしてそうするのかは，方法や証拠の問題として，ある程度彼らの学問内部の問題である。しかしまた，それは今日のアメリカの知識の社会的編成の問題でもある。いずれの場合でも，それは学者の権威と我々の道徳的責任に関わっている。(122)・・・啓蒙主義的態度では，データの問題は存在論的かつ認識論的問題である。すなわち，科学が世界内の諸客体についての真理を発見するべきものであるならば，中立的で，観察可能な事実と明確な言語や概念化存在しなければならない。だから啓蒙主義的真理は発見されるものなのだ。それに対して，相互行為論者の**真理は制定される**。相互行為論者の存在論では，事実は政治的および社会的諸過程を通して制定される。」(K.P.Addelson, 1990：135)

ストラウス等はこの K.P.Addelson のシンボリック・インターアクショニズム理解に賛成し，次のように言っている。

「理論は『外』に既に存在する実在の発見された諸側面を定式化したものではない。・・・**真理は制定される**。」(A.Strauss & J.Corbin, 1994：279)

理論は発見の定式化ではなく，真理は制定されるというくだりは，認識論における真理の相対性を論じる relativism の立場を示すものであるが，ここから直ちに真理を制定する相互行為過程の外部に存在する実在（いわゆる独立性テーゼ）を否定すると言うことにはならない。だから次のような多声的解釈という議論が出てくるのだ。

「理論は，研究者によって採用された視点からなされる（現実についての）一つの解釈である。ある一つの理論が一つの解釈であるということは，その堅実さや有用性を判断できないと言うことではない。・・・解釈は常に暫定的で，部分的に否認され，永久に修正され続ける。・・・そして，それは時代の社会的現実との関係の影響を強く受ける。」(A.Strauss & J.Corbin, 1994：279)

この点は，A.Strauss (1993) では次のように述べられている。まず，新カント派の E.Cassire (1944) の次の件を引用する。

「人間は象徴的宇宙に住んでいる。・・・人間は直接，実在に直面することはない。つまり，それをいわば対面的に見ることは出来ない。・・・物それ自体を直接扱う代わりに，人間はある意味で常に，自分自身と会話している。」(1944：25)

そして，人間は実在をそれ自体としては知り得ないとして，次のように言う。

「外的世界は象徴的表象，すなわち『象徴的宇宙』である。外的世界も内的世界も，相互行為を通して作り出され，作り直される。結局，外的世界と内的世界を隔てるものはない。・・・『社会構築主義者』は人間が知りうる世界は

構成された世界だけだと断言するが，・・・プラグマティスとはもっと明確に，相互行為を通して行為者たちと諸行為対象との間の関係が構成される，すなわち，その関係は制定され，繰り返し制定され直すと断言する。・・・ポストモダニズムのいくつかの説では，自然科学者にせよ社会科学者にせよ科学者たちはリアリティを構築し，ついで観察者の観察の立場を位置づける方法を展開するか，研究対象の人々との直接的な私的体験以外の報告をすることを諦めるかしている。・・・それに対して，プラグマティストやシカゴ学派の相互行為論者は A.Schütz (1966) がリアリティの一次的（地元の人々の）解釈についての二次的（分析者の）解釈と呼んだものに対して，『客観的相対主義』の立場を採ったとする。すなわち，リアリティに対しては複数のパースペクティヴズが不可避であり，観察やそれらの結果の有用性について検証を通して，あるパースペクティヴやいくつかのパースペクティヴズの結合したものが暫定的に採用される。・・・このように，科学者たちですら実在についての諸構成概念について論じ合い，それを交渉して決め，それはつねに改訂されていく。」(27～29)

こうして，パースペクティヴ実在論は物自体としての実在を否定しないが，それへの関心を薄れさせ，人々が構成する現実，すなわち表象の方に関心を集めていく。また，現実（実在）に関する理論は，人々が制定する真理であるから，当然，それは誤りうるものであると主張する。

「**理論は誤りうる。**」(A.Strauss & J.Corbin, 1994 : 279)

ここで言明されているのは可謬論 (fallibilism) の立場であり，いわゆる「知識テーゼ」を認めていないと言える。

また，グラウンデッド・セオリーとは概念間や概念集合間のありそうな関係性についての体系的陳述であるが，むき出しの命題を提示するのではなく，広範囲な事柄に言及した記述的で概念的な厚い文脈の中に埋め込まれて提示されるという。

「グラウンデッド・セオリーの方法論は，・・・行為者たちが自分自身や他の行為者たちについての視点や解釈を持っていると仮定する。・・・そして彼らの解釈や視点を，自らの解釈（概念化）の中に組み入れようとする。・・・今風に表現すれば，複数の「声」を注意深く聞くと言うことだが，それらは，グラウンデッド・セオリーの方法論を採用する研究者によって**概念的に解釈される**と言うことに注意しなければならない。」(A.Strauss & J.Corbin, 1994: 280)

以上のように，A.Strauss & J.Corbin の存在論，認識論，そして方法論の立場は，やはり，パースペクティヴァル実在論，可謬論（相対主義）そして解釈主義の組み合わせであると言えよう。こうした視点に立てば，次のくだりも決して矛盾した表現ではないことが明瞭に理解されよう。

「グラウンデッド・セオリーとは，体系的に収集され，研究プロセスを通じて分析されたデータに基づいて構築された理論である。この方法論では，データ収集，分析，そして最終的な理論が，相互に密接な関連をもっている。・・・研究者のすることは，研究の現場からスタートし，データから理論が立ち上がってくるに任せるのである。データから導き出される理論は，経験や単なる理論上の概念から作り出される推論よりも『現実感』があるように思われる。・・・

データに基づいた概念というのが，この方法論の主要な要素なのだが，研究者のもつ創造性もまた絶対に欠かすことができない構成要素である。・・・分析とは研究者とデータとの相互作用なのである。つまりサイエンスでありアートなのだ。一定程度の厳密さとデータに基づく分析という意味で，科学を意味する。また，カテゴリーの命名，話を引き出す問いかけ，比較，そして整理されていない生のデータの山から斬新で統合され，かつ妥当な理論的枠組を抽出すること，これらすべてを適切に行うという研究者の能力の中に創造性は宿っている。」(A.Strauss & J.Corbin, 1998, p.20～21)

(2) コード化

コード化はグラウンデッド・セオリー・アプローチで用いられるデータ解釈・理論構築の中心的手続きである。すなわち，コード化とはデータを概念で圧縮し，諸概念の集合としてのカテゴリーを精緻化し，カテゴリー間の関係についての命題をたてる作業である。

「コード化とはデータをバラバラにしたうえで概念化し，理論を形成するために統合していく分析のプロセスである。」(A.Strauss & J.Corbin, 1998,p.9)

コード化手順のねらいとしては，次の点が指摘されている。

① 理論の検証ではなく，理論の構築を行う。
② 山のような量の生のデータの分析のための道具となる。
③ 今までとは異なる意味を現象から読み取れるようにする。
④ 体系的であると同時に創造的である。
⑤ 理論を構築するための部材となる概念を明らかにし，発展させ，相互に関係づける。

(3) オープン・コーディング (open coding)

データから概念やカテゴリーを生成するために最初の事例のテクストの一行ごとの詳細な分析が行われる。これを**ミクロ分析**と呼ぶ。ミクロ分析では，まずオープンコーディングの操作が行われる。**オープン・コーディング**とは，データの中から概念を識別し，それらの特性 (property) と次元 (dimension) を発見し，それらに基づいて諸概念をカテゴリーにグループ化し，またカテゴリー内のサブカテゴリーに分節化していく分析上のプロセスである。ここで，**概念**とは，命名された現象である。それは出来事，事象，あるいは行為/相互行為を抽象的に描写したものであり，研究者がデータの中で重要であると識別したものである。現象を命名する目的は，共通の見出しや分類で，同様の出来事，事件，ならびに事象を一括りにすることである。一括りにされる現象は共通の特性や関連しあう意味を持っている。命名の際に，テクスト内の言葉をそのまま使う場合（**インビボ・コード**）と，研究者が言い換えて概念化する場合（**オープン・ラベル・コード**）がある。

こうしてテクストから無数の概念が生成される。これらの諸概念の中で少なくとも一つの特性を共有するものを選りすぐって，一括りにしたものが**カテゴリー**である。同じカテゴリー内の諸概念は，それら全体で共有する特性の他にいくつかの諸概念だけで共有する特性をもつ場合もあるだろう。こうしたカテゴリー内で特性を共有する部分集合を**サブカテゴリー**と呼ぶ。

(4) 軸足コーディング (axial coding)

軸足コーディングとはカテゴリーをそのサブカテゴリーに関係づけていくプロセスのことである。このコーディングは，一つのカテゴリーを軸としてその回りに他のカテゴリーを特性と次元のレベルで結びつけるものなので軸足と言う用語が使われている。軸足コーディングの目的は，オープン・コーディングの段階でバラバラにしたデータを再度集め，組み立てていくことだ。軸足コーディングは次のような順序で行う。

① 一つのカテゴリーの特性とその次元を配列する（オープン・コーディングの段階で着手されている)。
② 現象に関連している，さまざまな条件，行為／相互行為，帰結を明らかにする（パラダイムの使用)。
③ カテゴリーとサブカテゴリーの関連を示す命題を立てる（理論の浮上)。
④ 主要なカテゴリー相互の関係の仕方を示す手掛かりをデータの中から探す。

このように，軸足コーディングはパラダイムを用いてある現象（カテゴリー）が生じる構造・条件やプロセス（サブカテゴリー）を明らかにする作業である。ここで**パラダイム**とは，構造をプロセスに統合させるための道具である。ここに，**構造**とはカテゴリー（現象）が位置しているある諸条件をもった脈絡のことである。また，**プロセス**とは，時間の経過の中で現れてくる現象に関連した行為／相互行為のつながりのことである。A.Strauss & J.Corbin は**条件，行為／相互行為，帰結**というパラダイムを用いる。

① **条件**；なぜ，どこで，いつ，どのように起こったのかという問に答えるもの。すなわち，現象を生

む周囲の事情や状況。

② **行為／相互行為**；誰へ，どのようにという問に答えるもの。すなわち人々の争点，出来事，問題への決まったやり方（ルーティン）や戦略的反応。

③ **帰結**；行為／相互行為のために何が起こったのかという問に答えるもの。すなわち，行為／相互行為の結果。

この①が構造の，②と③がプロセスの内容である。このように，繰り返し現れる出来事，事件，事象，行為／相互行為のパターンを現象として捉え，その現象をもたらす，原因となる条件，介在する条件，文脈的条件（行為／相互行為の対象となる状況）を明らかにする作業が**軸足コーディング**である。

(5) 選択的コーディング (selective coding)

選択的コーディングとは理論を統合し，精緻化するプロセスのことである。統合の最初のステップは中心的カテゴリーを決定することである。中心的カテゴリーを選定する基準としては次のものがある。

① 他のすべての主要なカテゴリーと関係づけられるもの。

② データの中で頻繁に出現するもの。

③ カテゴリー間の関係の説明は論理的で一貫している必要がある。

④ 抽象度の高いものでなければならない。

⑤ 概念が他の諸概念と統合され，分析上精緻化されるにつれて，理論の説明力が増していかなければならない。

⑥ 概念特性の可変性の範囲を，その理論が説明できなければならない。

中心的カテゴリーを決定する作業として，ストーリー・ラインを書く作業，ダイアグラムを描く作業，メモ書きにより見直しする作業などがある。**ストーリーライン**とは，記述的なストーリーを概念を使ったストーリーで書き直したものである。ここに，**記述**とは日常の語彙を使って，出来事，場面，人物，物，場所，経験などに関するイメージ，観念，感情，感覚を伝える作業のことである。だから，**記述的ストーリー**とは一連の出来事の流れ，それらの背景や起こった場所，登場人物や物を日常言語で綴ったものである。それに対して，**ストーリーライン**は，出来事や背景，人物や物を概念化し，さらに，それらの概念や概念グループとしてのカテゴリーやサブカテゴリーの関係を命題化して理論的に述べられた筋書きである。

V 構築主義バージョン GT のコーディング理論 (K.Charmaz, 2006)

ここでチャーマズのコーディング理論をとりあげておくのが役立つだろう。

(1) 質的なコーディング

分析の第一歩は**質的なコーディング**，すなわちデータが何を示しているのか定義づけること，である。コーディングはデータの各断片を要約し，解説すると同時にカテゴリー化する名称を与える作業である。コーディングにはデータの中に具体的に書かれていることを超えた分析的な解釈が含まれる。すなわち，データの中のこれらの陳述はどの理論的カテゴリーを示しているのかを問いながら，その部分に概念的名称を与えるのである。注意深くコーディングすることで，参与者達の視点から，行為や解説，感覚や感情，ストーリーや沈黙が理解される。世界は人々の経験として現れ，それはそこに持ち込まれる言語や行為を通して知ることが出来る。だからコード化において言語が中心的役割を果たし，グラウンデッド・セオリーのコードは我々の言語，意味，そして視点から生じ，我々はそれらによって自らと参与者たちの経験的世界を知ることが出来る。世界は実在するのではなく，我々が参与者と共に言語的コミュニケーションを通して構築していくものである。我々はデータの収集・分析の中で参与者とともにコードを構築し，それに基づいて経験的世界を解釈していく。

チャーマズによれば，グラウンデッド・セオリーのコーディングは少なくとも，**最初のコーディング** (initial coding) と**焦点づけられたコーディング** (focused coding) の二つの段階からなっている。最初のコーディングでは最初のデータについて各語ごと，行ごと，あるいは断片ごとに名前が付けられる。そして，その後に行うさらなるデータの収集と分析のためのアイデアを探す。最初のコーディングを行っている場合に

は，あらゆる可能な理論的方向が開かれている必要がある。そのために，ストラウス／コービンはこの段階をオープン・コーディングと呼んでいるわけである。その後，焦点づけられたコーディングを用いて，膨大なデータの中から最も重要なカテゴリーを狙いを付けて発展させていく。そして，さらに第三のコーディング段階として，グレイザーの理論的コーディングを採用している。

(2) 最初のコーディング

最初のコーディングをしているときに，このデータは何なのか，このデータは何をしめしているのか，誰の視点からのものか，どんな理論的カテゴリーを示しているのかなどを問う。しかし，最初のコーディングは既存のカテゴリーにデータを当て嵌めるのではなく，データに密着し，データの各断片の中に行為を見出すように試みなければならない。行為を綿密に検討し，可能な限りデータを行為としてコード化するように試みるのだ。こうすることで，既存の理論を立証するために都合良くデータを選別し利用するといったやり方を避け，データから理論が浮上してくるようにすることができるのだ。

最初のコードは暫定的で，相対的である。それが暫定的というのは，その時点で手持ちのデータに最適なコードを作るが，新たなデータを収集すれば別の分析の可能性が開かれ，コードが修正され発展していくからだ。

最初のコーディングは早さと自然さが勝負である。素早くやることで思考が湧いてくるし，データの新鮮な見方が生まれる。グレイザーは動名詞によるコーディングがプロセスを見出し，データに密着するのに役立つと言っている。データに密着し続け，可能な場合には，参与者たちの言葉や行為から始めると彼らの表現の流動性を保持したまま，新しい見方が可能となってくる。こうすれば参与者たちの視点で分析を始めることが出来る。これが肝心な点だ。もし，参与者たちの意味や行為を無視し，曲解し，見落とせば，部内者の視点ではなく，部外者の視点を反映したものになる。データをコードに合わせるのではなく，コードをデータに合わせるようにしなければならない。そのためのコーディングの原則をいくつか挙げると次のようになる。

① 変更可能にしておく。
② データに密着する。
③ 簡潔で正確なコードを用いる。
④ 短いコードを作る。
⑤ コードに行為を保存する。
⑥ データとデータを比較する。
⑦ データ間を素早く移動する。

コーディングを行うデータの単位は，インターネット・データやドキュメントのようなものの場合には単語ごとのコーディングが向いていて，インタビュー，観察，記録，エスノグラフィー，伝記などのデータの場合には行ごとのコーディングが向いているといわれる。しかし，実際の分析では最初のデータについては行ごとのコーディングが行われても，その後の追加されたデータについては出来事・行為が含まれるテクスト断片ごとのコーディングが行われていることが多い。また，出来事ごとのコーディングはフィールドノーツのような観察されたデータに特に向いている。

行ごとのコーディングでは，次のような柔軟な方略を採用すればコード化は容易になる。

① データを構成部分やプロパティに分割する。
② 注目する行為を定義する。
③ 暗黙の仮定を探す。
④ 暗示された行為や意味を詳しく説明する。
⑤ 論点の意味を明示する。
⑥ データのデータを比較する。
⑦ データ内の不一致を確認する。

このような戦略を用いれば，データに密着し，データ内の手掛かりに従って，理論を発展させることが出来，空想という理論的飛行へと離陸することなく，土台から一歩一歩分析を組み立てていける。また，行ごとのコーディングによって，データを諸カテゴリーへと分類する作業によって，参与者の世界観に浸りきって，それを疑問も抱かずに受け入れてしまうことはなくなる。データを批判的に分析することで，参与者たちの行為を理解し，重要なプロセスを確認することが出来る。その際に，次のような問を発すると良い。

① ここで問題となっているプロセスは何か？どうやってそれを定義しうるか？
② このプロセスはどのように展開するのか？
③ このプロセスに巻き込まれている間に，参与者たちはどのように行為するのか？
④ このプロセスに巻き込まれている間に，参与者たちは何を考え，また感じると言っているのか？観察された行動は何を示しているのか？
⑤ このプロセスはいつ，なぜ，どのように変化するのか？
⑥ このプロセスの結果はなにか？

コーディングを行うには，データとデータを比較して様々な出来事/行為の類似性や差異性を見つけなければならない。比較は，

① 同じインタビュー・データ内の陳述どうし，出来事どうしの比較。
② 異なる参与者に対して行ったインタビュー・データ間の，陳述や出来事の比較。
③ 同一個人に行った最初のインタビュー・データとその後のインタビュー・データでの陳述や出来事の比較。
④ 異なる時間や場所での観察結果や事件の比較。
⑤ 反復的活動を観察している場合は，ある日に起こった事をその後の日々の同一の活動と比較する。

最初のコーディングでは，**インビボ・コード**によるコードが多用される。インビボ・コードは参与者が使っている用語をそのまま用いたものである。インビボ・コードには次の三つがある。

① 短縮されているが重要な意味を伝える，**誰もが「知っている」一般的用語。**
② 意味や体験を捉える，**ある参与者が新たに生み出した用語。**
③ 特定の一グループの視点を反映した，**グループの内部で使われている特殊な用語。**

インビボ・コードに着目し，その中に手掛かりを探すことで，何が起こっていて，それが何を意味するのかを深く理解することが出来る。インビボ・コードを用いれば，参与者たちの世界にしっかりと根付いた分析が出来る。

(3) 焦点づけられたコーディング

最初のデータの一行ごとのコーディングを終えて分析の方向付けが定まったら，次にはこれまでのコードの中で頻繁に用いられ，重要であるコードを用いて，大量のデータをふるいに掛けてより分ける。これを焦点づけられたコーディングと呼ぶが，**焦点づけられたコーディング**は，語ごと，行ごと，出来事ごとのコーディングよりも方向付けられ，選択的で，概念的である。この目標の一つは，最初のコードの十分性を確かめることである。チャーマズの最初のコーディングがストラウス／コービンのオープン・コーディングに対応するとすれば，焦点づけられたコーディングは軸足コーディングに対応する。しかし，軸足コーディングに頼ると研究者はデータに分析的枠組みを押しつける危険があるので，**注意深い比較**に止めるべきであると考えている。そして，チャーマズはストラウス／コービンの条件・行為／相互行為・帰結パラダイムに代わって語りの諸形態を用いてデータを分析している。これは，データの中の

① 語りの伝記的，相互行為的文脈
② 参与者たちが誰に語るかを決定する社会的・経験的条件
③ 参与者たちが述べた語る意図
④ 参与者が語った内容

⑤　参与者たちの語り方

を綿密に検討し，語り方を**「打ち明ける」「知らせる」「戦略的に公表する」「誇示する」**の四つのタイプに分けたものだ。

(4)　理論的コーディング

ストラウス／コービンの選択的コーディングに対応する第三のコーディング段階として，チャーマズはGlaser (1978, 1998) の**理論的コーディング**（表３）のやり方を採用している。これは焦点を絞ったコーディングをするなかで精緻化したコード・システム内の諸コード間の関係を明確にするものだ。グレイザーはストラウス／コービンの軸足コーディングがプロクルステスの寝台になりかねず，データからカテゴリーが浮上してくるのを待たない帰納法にあるまじき手法として批判しているが，チャーマズもこの点に賛同し，焦

表３　グレイザーの理論的コード

グレイザーは，理論的コードとは実質的コード間の関係を明瞭にし，一貫性をもった分析的筋書きを描くためのコードとしている。そして，理論的コード群を次の26挙げている。

1．６C's：原因，文脈，周囲の状況，付随的事態，帰結，共分散，条件・限定要因
2．プロセス：段階，段階的進行，位相，通過，キャリア，軌道，連鎖，形成，循環
3．程度：範囲，強度，量，極性，境界，連続体，等級，平均，偏差
4．次元：次元，要素，分割，部分，面，断片
5．タイプ：形態，種類，様式，クラス，ジャンル
6．戦略：戦略，戦術，操作，計略，対処，技法，手段・目標，調整
7．相互性：相互効果，互酬性，双方向的依存，対面的相互作用
8．アイデンティティ・自己：自己イメージ，自己概念，自己価値，アイデンティティ
9．切断点：境界，重大な接続，分岐点，分割，溝，内外，多分法
10．手段・目的：最終目標，目的，予想される結果
11．文化：社会規範，社会的価値，社会的信念
12．合意：同意，契約，等質性，葛藤，協同，認識のズレ，順応
13．主流：社会統制，社会化，社会秩序，成層化，社会移動
14．理論的：倹約，範囲，統合，密度，概念レベル，データとの関連性，多の理論との関連性，実用性，凝縮可能性，帰納・演繹のバランス，説明力・予測力
15．秩序づけ：構造的秩序，時間的秩序，概念的秩序
16．単位：集合体，集団，組織，社会的世界，地位的単位，家族，社会
17．見解：概念，問題，仮説
18．モデル：線型モデル，特性空間
19．根本原理：基本的な社会構造プロセス，基本的な社会構造状態，基本的な社会心理的プロセス，基本的な心理プロセス
20．対になった対立物：内集団・外集団，顕在・潜在，明示・暗示，図と地，帰納・演繹，生成的・検証的
21．表示：記述的，規制的，視点，評価，解釈，概念化
22．スケール：リッカート・スケール，ガットマン・スケール，ランダム・ウォーク・スケール
23．構造・機能：権威構造，準拠集団，役割構造，地位集合
24．境界：信頼境界，許容境界，前線
25．単位のアイデンティティ：専門職
26．平均：平均，メジアン，モード

(Glaser, B.G., 1978)

点づけられたコーディングによって飽和したコード・システムが完成した段階で理論的コーディングを実行しようと考えている。そして，もし理論的コードを巧く使いこなせば，切り味の鋭い分析が出来るが，理論的コードが分析に強制的な枠組みを与えるならばそれは用いるべきではないと考えている。そのための判断基準として，チャーマズは次の問を立ててみることを勧める。

① これらの概念はデータが示すものを理解するのに役立っているのか？
② もしそうなら，どのように役立っているのか？
③ これらの概念で，データのこの行やこの断片で起こっていることを解釈できるか？
④ これらの概念なしに，データのこの断片を十分に解釈しうるのか？

こう問うて，理論的コードがデータの理解に不可欠でないならば，そのコードはそれ以降の分析で出番はない。

Ⅴ GTの方法的手続きとして継承すべき点

(1) 方法的解釈学のGT理解 (D.L.Rennie, 1998 ; 2000 ; D.L.Rennie & K.D.Fergus, 2006)

D.L.Rennie (1998) はA.L.Strauss & J.Corbin (1990, 1998) がB.G.Glaser & A.L.Strauss (1967) から修正した点を次の四つであるとする。

① それまで，話者の語った経験や直接見た行動の観察をデータとしていたものを，研究者の思い出した経験（内観）もデータとして採用することにした点。
② 絶えざる比較法の中に仮説検証の手続きを組み込むことにした点。
③ データの中に示されていない，研究している現象に影響を及ぼすと研究者が考えた条件をも想定する点（条件・帰結マトリックスの採用)。
④ 社会現象を一つのプロセスの中で捉えるための変換の公理的図式（コーディング・パラダイムあるいはプロセスのためのコーディング）を強制的に適用する点。

また，A.L.Strauss & J.CorbinとB.G.Glaserが袂を分かった後も一致している点は，

① 絶えざる比較分析の採用
② 理論的サンプリングの採用
③ 理論的メモ付けの重視
④ パースペクティヴィズムの堅持

であるという。A.L.Straussらの立場とJ.Deweyらのプラグマティズムの立場で異なる点は，プラグマティズムでは一元論にしたがって顕在的行為のみをデータとして採用するが，ストラウスらは言語的報告もデータとして採用することであると言われる。そして，両者に共通しているのが，①道具主義の採用，②仮説検証の重視，③社会現象の過程的把握，④合理主義的立場の採用だという。これに対して，B.G.Glaser は①立証よりも妥当性の確証の重視，②帰納法の墨守，③社会現象の過程のみならず構造の把握も重視する立場であると言われる。

そして，A.L.Strauss & J.Corbinの行った修正の問題点は，

① データからのアブダクションによらず，合理的推論によって仮説を立てることを許容した点
② 条件マトリックスやコーディング・パラダイムの使用を強要する点
③ 分析者自身の体験（内観）をデータとして使用する点
④ 仮説検証による理論の立証方法を採用した点

だとした。①②④はGTにとって肝心な，データに基づいて理論を浮上させるという発見的方法を放棄させる可能性がある。分析の初期段階で未だ機が熟さぬうちから，仮説を合理的推論によって立てることは，データの方を理論に過度に感応させ，Procrustesの寝台というGTが最も批判したやり方に戻ることになると言うのだ。

このように，データから理論が浮上してくるのを待つのではなく，予め決められた結論をデータの中に求めるやり方は，データの解釈をやり終えてみると，最初の出発点の理解（前提や先入観）にただ戻るだけで，

なんら新しい解釈やよりよい解釈を産み出さず，明るみ（Lichtung）を生まない悪循環に陥らせる危険があるというのだ。だから，修正点①②④を削除して，B.G.Glaser & A.L.Strauss（1967）の元々のやり方に戻るべきであるというのが，D.L.Rennieの主張である。

シンボリック・インターアクショニズムでは意味解釈が相互行為過程で行われることを強調しているのだから，コーディング・パラダイム（プロセスのためのコーディング）を用いて軸足コーディングを実行するのはシンボリック・インターアクショニズムの三つの前提の考え方に叶っていると言える。しかし，データの中に記述されていることは必ずしも過程に関することだけに限られない。だからこそ，グレイザーは理論的コードというどのような記述内容でも分析できるコーディング・システムを提示しているのである。もちろんこのグレイザーの理論コードには表３の２．ようにプロセスも含まれている。私は，K.CharmazやD.L.Rennieの意見に賛成であり，また，理論を書き上げる段階までコーディング・パラダイムや理論的コードに頼らず，インビボ・コード中心の分析を進めるべきだと考えている。

修正点③について言えば，ムスターカスの自伝的没入と同じ内観法の採用であるが，イーミックな視点により人々の共同体の認識的慣習に慣れ親しむ方法から逸脱し，ロマン派的感情移入の解釈法へと向かうものだ。私は，C.Geertz（1973；1983）と同じ立場に立って，人々のことを分かるということは，彼らのシンボル体系に精通することであるということを強調したい。

(2) 標準的GTの構成要素と構築プロセス（N.P.Pandit, 1996）

このように考えると，GT法の手続きとしてはN.P.Panditの纏めた手続きを出発点に考え，D.L.Rennieの方法的解釈学のやり方をGTの前後に導入する方法が一つのやり方として浮かび上がってくる。まず，N.P.Panditの議論から見ていこう。

N.P.Panditよると，概念，カテゴリー，そして命題がグラウンデッド・セオリーの三つの構成要素であるという。

概　　念；諸々の出来事や活動を比べて，似通ったものに付けられた名称。
カテゴリー；形態は異なるが同一のプロセスに向けられたと言う点で類似する諸出来事，諸活動を表している諸概念を，より抽象的表題で一括りにしたもの。
命　　題；あるカテゴリーとその諸概念との間の関係，あるいは諸カテゴリー間の関係を示す陳述。

そして，N.P.Panditのよると，グラウンデッド・セオリーの構築は，**研究の設計**，**データの収集**，**データの整理**，**データの分析**，そして**文献比較**の五つの段階からなる。そして，これらの内部の手順として９のステップが存在する（表４）。これらの段階やステップは，①**構成概念の妥当性**，②**内的妥当性**，③**外的妥当性**，④**信頼性**という四つの規準に照らして評価される。**構成概念**の妥当性は，明確にまた詳しく述べられた操作手順を確立することで強化される。**内的妥当性**は擬似的な関係でない，ある状態が別の状態を引き起こすという因果的関係を確立することで強化される。すなわち発見の確実性や真理値の問題である。**外的妥当性**は，その研究の発見を一般化しうる領域が確立することで強化される。ここでは統計的一般化すなわちより大きな母集団に当て嵌まると言うことではなく，分析的一般化すなわちより広い理論領域に一般化（実質理論から形式理論への展開）できることが求められる。**信頼性**はデータ収集方法やデータ分析方法などの諸操作を繰り返しても同じ結果が得られることを示すことで強化される。

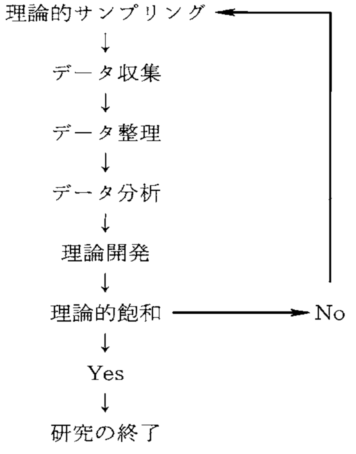
第一ステップは根本的な研究上の問を立てることだ。この問は研究の焦点をはっきりさせるのに十分なだけ絞るとともに，予め気が付かなかった掘り出し物の発見ができるほど十分に柔軟でなければならない。こうした問を立てられるように，研究しようとしている問題領域の調査報告書や専門的な学術文献を読破しておく必要がある。

第二ステップは最初の調査・分析対象となる事例を選定しなければならない。選定には理論的サンプリングの方法が採られる。理論的サンプリングはこの第二ステップの他に，第六ステップ，第七ステップでも採用される。

第三ステップでは，厳密なデータ収集のための計画案を策定する。すなわち，事例研究のためのデータベースを体系的に準備し，複数のデータ収集方法を採用し，質的データのみならず量的データも用るデータ収集

表4　N.P.Pandit の GT のステップ

段　　階	作　　業	原　　理
A　研究設計段階		
①学術的文献レビュー	研究上の問の確定	研究の焦点の明確化
	先験的構成概念の定義	不適切な差異化の抑制と外的妥当性の鋭敏化
②事例の選択	**理論的サンプリング**	理論的に有用な事例への集中
B　データ収集段階		
③厳密なデータ収集法の開発	事例研究**データベース**の作成	信頼性と構成概念の妥当性の増大
	複数のデータ収集法の採用	データに基づいた理論を構築するための三点測量法。内的妥当性の増大。
	質的データと量的データ併用	証拠の相乗効果の検討
	重複的なデータ収集と分析	迅速な分析によりデータ収集法の調整
④フィールドへの参入	**柔軟で機会主義的なデータ収集**	浮上したテーマや独特な事例の特徴の利用
C　データ整理段階		
⑤データ整理	データの**年代的配列**	時間的因果関係，プロセスの検討
D　データ分析段階		
⑥（最初の）事例のデータ分析	**オープンコーディング**	概念，カテゴリー，命題の開発
	軸足コーディング	カテゴリーとサブカテゴリーとの関係の展開
	選択的コーディング	諸カテゴリーを統合して理論的枠組みを構築する。
		内的妥当性の強化
⑦理論的サンプリング	事例横断的な逐語的及び理論的な**反復作業**	理論的枠組みの確証，拡大，鋭敏化
	（理論的飽和に達するまで②～⑥を繰り返す）	
⑧分析の終了	**理論的飽和**に達したか確める。	更に事例分析を追加しても理論の改善が見られなくなる。
E　文献比較段階		
⑨浮上した理論を先行諸研究と比較する	類似する諸理論枠組みとの比較	その研究で発見されたことを一般化しうる領域の確立。外的妥当性の向上。



方法を決定する。グラウンデッド・セオリー・アプローチでは複数のデータ収集方法の採用を奨励している。これは，データの切片（slice of data）と呼ばれる。複数のデータ収集法を用いて，多様なデータを得ることで，ある現象のカテゴリーのプロパティが豊に発見され，多様な見解が得られる。このような見解を**データの切片**と呼んでいる（B.Glaser & A.Strauss, 1967）。

第四ステップでは，フィールドに参入してデータを収集しながら分析することで，浮上してくる発見に照らしてさらなるデータ収集方法を調整する。これを，**統制された機会主義**という。

第五ステップでは，データを整理する。一つの方法はデータを**年代的（chronological）に配列する**ことだ。すなわち，インタビューで得た語らのデータであれば，語られた順で書写されたテクストを，語られた内容（出来事，行為など）の起こった順に従って配列し直すことだ。こうして，時間的経過の中での原因となる出来事を特定することが出来る。

第六ステップはデータの分析である。データの分析とは，コーディングを通して行われる概念の産出，カテゴリーの生成，そして理論の展開のことである。**コーディング**とは，データを分解し，概念化し，新しい方法で組み立て直す操作のことである。コーディングには，オープン・コーディング，軸足コーディング，そして選択的コーディングの三つがある。

オープン・コーディングとは，データの中から概念を識別し，それらのプロパティとディメンションを発見する操作のことである。すなわち，オープンコーディングでは，データの分解とデータの比較という二つの操作が行われる。**データの分解**では，何が，どこで，どのように，いつ，どのくらいなどの問を発し，データの中でそれらについて記載されている部分を取り出す作業を行う。**データの比較**では，同一テクスト内や異なるテクスト間で，分析単位同士を比較して，類似した出来事や行為を一纏めにして，同じ概念的名称を付ける作業を行う。諸概念をより高次で抽象的なレベルでグループ化していく作業はカテゴリー化と呼ばれる。

軸足コーディングとは，カテゴリーとそのサブカテゴリー間の結びつきを明らかにする作業である。

選択的コーディングは，開発された諸カテゴリーを統合して理論的枠組みを作り上げる作業である。ここでは，研究されている現象の記述的な物語であるストーリーを概念化し**ストーリー・ライン**を作り出す。これに基づいて**中心的カテゴリー**が選ばれ，それと副次的カテゴリーとの関係が命題として定式化されて理論が構築される。

第七ステップでは理論的サンプリングを行う。**理論的サンプリング**は，収集したデータをコード化し，分析しながら，そこで浮上してきたカテゴリーのプロパティや理論的命題を発展させる目的で，次にどんなデータをどこで見つけるか決める方法である。そして，カテゴリーのプロパティや理論的命題を発展させる可能性のあるカテゴリーに関するデータだけが，次に収集し分析されるデータとして選定される。理論的サンプリングによって追加され得べき事例は，R.K.Yin（1989）によれば，次の三つのタイプに分かれる。

① 理論的カテゴリーを充実させ，浮上した理論を拡張する事例
② 浮上した理論を検証するために，これまでの諸事例と同じ結果を再現する事例
③ 浮上した理論を発展させるために，これまでの諸事例と正反対な結果を生む事例

第八ステップでは分析の終了を決定する。理論的サンプリングをいつ止めるかの判断基準はそのカテゴリーや理論が**理論的飽和**に達したときである。理論的飽和とは，研究者が新たに，データを追加しても，そのカテゴリーのプロパティをもう発展することが出来ない状態である。理論的飽和に達してないと判断されれば理論的サンプリングに基づき，第二ステップに戻り，カテゴリーや理論を発展させる可能性のある新たな事例を選定し，データを収集し，分析する。理論的飽和に達しない限り，第二ステップから第七ステップまでの作業を繰り返す。

第九ステップでは，既存の先行諸研究の文献をレビューし，浮上した理論（**グラウンデッド・セオリー**）と比較検討する。

(3) 方法的解釈学と GT 法の結合

最後に，私の基本的立場を再確認したい。まず，プラグマティズム，シンボリック・インターアクショニズム，グラウンデッド・セオリーに通底する，パースペクティヴァル実在論，相対主義の認識論，方法的解

積学の方法論を採用することである。

私は1993年頃から新潟県の杜氏集団の調査研究を続けて来たが，その研究過程を具体的に振り返ると次のようになる。

①　職業コミュニティに関する先行諸研究（特に，Salaman，1947；Bulmer，1975；Wenger，1998）を評論した。しかし，調査に先立ってそれらの研究を頭の中から消去する。これは現象学的判断停止に当たる。

②　インタビュー調査では，研究者が自らの諸前提を現象学的に判断停止しても，話者は自らの日常生活世界のなかで常識的に持ち続ける認識や情緒を通してしか自らの経験を語り得ない。そこで，こうした彼らの慣習的暗黙知を出発点としての理解（理解の先構造）として捉え，そこから解釈の循環（螺旋）を進める方法が採られるべきであると考えた。そのために，研究者自身もなるべく彼らの日常的な考え方，感じ方に精通し，彼らの慣習的暗黙知に近づけるような準備が不完全にせよ必要である。そこで，酒造労働者が必ず読んでいる日本醸造協会で刊行している技術的手引き書の類（例えば，「最新酒造講本」，「清酒製造技術」など），杜氏経験者などが執筆した民俗報告書類（例えば，「新潟県酒造杜氏組合連合会「越後杜氏の足跡」など），醸造関係の業界紙や研究所報（例えば，「醸界」や「酒類総合研究所報告書」など），杜氏の自伝類（例えば，内藤軒三「軒三自伝」，高浜春男「杜氏千年の知恵」，農口尚彦「魂の酒」など）を精読し，杜氏や酒造労働者の内面や常識的知識，感情などに精通することにした。

③　以上の諸情報を基に大まかな調査項目を設定し半構造的なインテンシブ・インタビュー調査を企画する。

④　実際の聞き取り場面では，既に知っていると思っていることを忘れ，一人一人の話者の言ったことを傾聴し，日常会話を進めるように，分からないことは聞き返し，話者の言いたいように話して貰い，録音する。相づちや，顔面表情を特別に統制することなく日常会話の聞き手に徹する。ただ，録音の妨げになる，話者との同時の発声は極力避けた。

⑤　録音データは，トランスクリプト化するが，エスノメソドロジーのやっているような抑揚などの表記は行わなかった。

⑥　インタビューは1993年から始めた。最初の聞き取り調査（宝山酒造の青柳長市氏など寺泊町の間瀬杜氏を対象としている）では，まだ，酒造業の実態をほとんど知らない時期での調査であったために，酒造工程とライフヒストリーの話が中心であった。しかし，その後1996年から越路町での三島杜氏の調査を実施し出稼ぎや酒造組合，研鑽組織などの話を聞き取れた。2005年からは科研費の補助を受け，吉川町・頸城村・柿崎町などで頸城杜氏の調査に入った。この時期には，主として職業コミュニティとしての杜氏集団を主題とする調査項目に特化した聞き取りを行った。すなわち，彼等のライフヒストリーと職業アイデンティティの発達，暗黙知として身につけている酒造技法，リクルート組織としての酒造従業員組合の支部の諸活動や蔵人＝酒屋仲間の生活共同の実態などに関する項目である。そして，2005～2006年には朝日酒造の調査に入った。ここでは，出稼ぎ集団は既に存在せず，工場長，製造部長，杜氏を初めとして総ての製造従事者が通勤の社員となっていた。そこで，質問も企業コミュニティに蓄積された技法，企業従業員としての意識を中心として聞き取りした。このように，長い調査期間の間に，インタビューは間欠的に行われ，ムスターカスの言う没入と孵化の過程を繰り返し，テーマが次第に，「酒造従事者集団の職業コミュニティから企業コミュニティへの変化に伴う杜氏世界の技能と意識の変化」へと結晶化していった。

⑦　インタビューと平行して，1996年暮れには脇野町の中川酒造に働きとして入蔵し実地で技法を学ぶと共に，蔵人の労働と生活を参与観察した。さらに，2005～2006年には越路町の朝日酒造で麹の切り返しや高温糖化もとの仕込み，醪の仕込みなどの作業を行うと共に製造技法などについての座学の講習を受けた。このような参与観察を行うなかで，次第に彼等の普段当たり前に使っている表現やジャーゴンを同じように理解出来るようになり，内側からの理解も進んだ。

⑧　こうして収集した様々なデータ（主としてインタビューのトランスクリプト，製造技法を理解するための仕込み配合表や品温経過表など数量的データ，参与観察の記録ノート，聞き取りや講習で得た文書，そして，2003年に実施した吉川町酒造従業員組合員を対象とした職歴調査と同一蔵で働いた経験のある酒屋仲間調査のデータなど）を質的整理法，ネットワーク分析などにかけて分析した。

⑨　以上の分析を基に諸論文を公表した。特に，伊賀（2006a）はC.Moustakas（1990）の『合成的叙述』

であり，伊賀（2007a）は『典型例としての個人的ポートレート』である。

このような私の杜氏集団の研究過程における方法的手続きを一般化して示したものが表5である。これらの研究手順は，Rennieの方法的解釈学とStraussらのGTを結合した方法論から生まれている。

表5　方法的解釈学の方向に展開したGT法の手順

1．**先行研究のレビューと先入観の明確化**（研究者の前提としている知識・理論の明確化とそれらの括弧入れ）

2．**探査**；調査対象者たちの共同体の知的慣習・シンボル体系に慣れ親しむためのヴァナキュラーな情報の収集と理解。これを解釈の循環の出発点とする。

3．**問題の設定**

4．**理論的サンプリング**による最初の対象者の選定

5．**データの収集**（非構造的・半構造的聞き取りと参与観察）

6．**データの整理**（トランスクリプション，図表の作成など）

7．**精査**；最初の話者のデータ分析
①　オープン・コーディング
②　軸足コーディング
③　選択的コーディング

8．**アブダクションによる仮説の設定**

9．**理論的サンプリング**による，次の話者の選定：この後5～7を繰り返す。

10．5～7の作業の中で，**分析的帰納**を実行して仮説の妥当性を確認し，仮説の再定式化とカテゴリーや概念の再定義を実行していく。

9～10のステップは，理論的飽和に達した段階で終了する。

11．**浮上してきた暫定的理論を現象の背景を含めた記述のなかに取り込んで物語を作成する。**この段階で，ステップ1の研究者の先入観とステップ2の人々のシンボル体系についての予備解釈である前提を振り返り，何が誤りであったのか，どのような新しい知見が追加されたのかがはっきりする。こうしてよりよい解釈の獲得が行われる。

参考文献

Addelson, K.P., 1990, “Why Philosophers Should Become Sociologists (and Vice Versa)”, in H.S.Becker & M.M.McCall (eds.) Symbolic interaction and cultural studies, Chicago: University of Chicago Press. 119-147.

Addison, R.B., 1989, “Grounded Interpretive Research: An Investigation of Physician

Socialization" in M.J.Packer &, R.B.Addison, (eds.) Entering the Circle, State University of New York, Albany, N.Y., 39-57.
————., 1999, "Grounded Hermeneutic Editing Approach", in B.F.Crabtree &, W.L.Miller (eds.), Doing Qualitative Reseach, Sage, Thousand Oaks.California, 145-161.
Annells, M., 1991, "Grounded Theory Method: Philosophical Perspective, Paradigm of Inquiry, and Postmodernism", Qualitative Health Research, 1(1):379-393.
Archer, M.S., 1995, Realist Social Theory: the morphogenetic approach. Cambridge: Cambridge University Press. 佐藤春吉訳, 2007,「実在論的社会理論」青木書店.
Baert, P., 2003, " Pragmatism, Realism and Hermeneutics", Foundations of Science, 8:89-106.
Benner, P., (eds.)1994, Interpritive Phenomenology-Embodiment, Caring, and Ethics in Health and Illness, Sage, London.
Blumer, H., 1969, Symbolic Interactionism : Perspective and Method, Englewood Clifts, New Jersey, Prentice Hall, Inc., 1991, 後藤将之訳「シンボリック相互作用論：パースペクティヴと方法」・草書房.
————, 1977, "Comment on Lewis" The Classic American Pragmatists as Forerunners to Symbolic Interactionism",The Sociological Quarterly, 18:285-289.
————, 1980, "Mead and Blumer: The Convergent Methodological Perspectives of Social Behaviorism and Symbolic Interactionism", ASR, 45:409-419.
Bogdan, R., & S.J.Taylor, 1975, Introduction to qualitative research methods. New York: Jhon Wiley.
Borkan, J., 1999, "Immersion/Crystallization, in B.F.Crabtree &, W.L.Miller (eds.), Doing Qualitative Reseach, Sage, Thousand Oaks.California, 179-194.
Boyatizis, R.E., 1998, Transforming Qualitative Information, Sage Thousand Oaks, California.
Bruyn, S., 1966, The Human Perspective in Sociology. Prentice Hall, Inc., New Jersey.
Bryant, A., & K.Charmaz, 2007, "Grounded Theory in Historical Perspective: An Epistemological Account", in Bryant,A., & K.Charmaz (eds.) The SAGE Handbook of Grounded Theory. Los Angeles: SAGE.31-57.
Burr, V., 1995, An Introduction to Social Constructionism. London,Routledge.田中訳「社会的構築主義への正体―言説分析とは何か」川島書.
Cassirer, E., 1944, An Essay on Man. New Haven, CT: Yale University Press.
Clarke, A.E., 2003, "Situational Analyses: Grounded Theory Mapping After the Postmodern Turn,Symbolic Ineraction, 26(4):553-576.
Charmaz, K., 1995, "Between Positivism and Postmodernism: Implications for Methods," Studies in Symbolic Interaction, 17:43-72.
————, 2000, in N.K.Denzin, & Y.S.Lincoln, Handbook of Qualitative Research, second edition, Thousand Oaks, Sage Publications. 藤原顕訳「質的ハンドブック２巻：質的研究の設計と戦略」北大路書房.
————, 2006, Constructing Grounded Theory: A Practical Guide Through Qualitative Analysis, Thousand Oaks, CA:SAGE Publications.
Chomsky, N., 1957, Syntactic Structure, The Hague: Mouton.
Crabtree, B.F., & W.L.Miller, 1999, "Using Codes and Code Manuals: A template organizing style of interpretation", in B.F.Crabtree &, W.L.Miller (eds.), Doing Qualitative Reseach, Sage, Thousand Oaks.California, 163-177.
Crotty, M., 1996, Phenomenology and Nursing Research.Churchill Livingstone, Melbourne.
————, 2003, The Foundations of Social Reseach, Sage, London.
D' Andrade, R., 1995, The development of cognitive anthropology.Cambridge,UK: Cambridge

University Press.
Dewey, J., 1929, Experience and Nature. New York: Dover, 河村望訳, 1997,「経験と自然」人間の科学社.
————, 1929, The Quest for Certainty. New York: Capricorn, 河村望訳, 1996,「確実性の探究」人間の科学社.
Dey, I., 1999, Grounding Grounded Theory. San Diego: Academic Press.
Feredy, J., & E.Muir-Cochrane, 2006, "Demonstrating Riger Using Thematic Analysis: A Hybrid Approach of Inductive and Deductive Coding and Theme Development", IJQM, 5(1):1-10.
Flick, U., 1995, Qualitative Forschung, Hamburg, Rowohlt Taschenbuch Verlag. 小田博志他訳「質的研究入門」, 2002, 春秋社.
船津衛, 1995,「シンボリック相互作用論の特質」, 船津衛・宝月誠編「シンボリック相互作用論の世界」恒星社厚生閣, 3～13頁.
————, 1997,「ミード研究の動向」船津衛編「G.H.ミードの世界」恒星社厚生閣 1～18頁.
Glaser, B.G, & A.L.Strauss, 1967, The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Reserach, Chicago:Aldine Publishing Company, 後藤, 大出, 水野訳「データ対話型理論の発見」, 1996, 新曜社.
Glaser, B.G., 1978, Theoretical Sensitivity, Mill Valley, CA:The Sociology Press.
————, 1992, Basics of grounded theory analysis: Emergence vs foecing. Mill Valley, CA: Sociology Press.
————, 1998, Doing grounded theory: Issues and discussions. Mill Valley,CA: Sociology Press.
————, 2002, "Conceptualization: On Theory and Theorizing", International Journal of Qualitative Methods, 1(2):1-31.
Guba, E.G., 1978, Toward a methodology of naturalistic inquiry in educational evaluation. Monograph 8. Los Angeles: UCLA Center for the Study of Evaluation.
Guba, E.G., & Y.S.Lincoln, 1994, "Competing Paradigms in Qualitative Research", in N.K.Denzin & Y.S.Lincoln (eds.) Handbook of Qualitative Research, Thousand Oaks, CA: Sage, 105-117.
Heath, H., & S.Cowley, 2004, "Developing a grounded theory approach: a comparison of Glaser and Strauss," Inrtnational Journal of Nursing Studies, 41:141-150.
Huber, J., 1973, "Symbolic Interactionas a Pragmatic Perspective: The Bias of Emergent Theory", ASR, 38:274-284.
Huehls, F., 2005, "An Evening of Grounded Theory: Teaching Process through Demonstration and Simulation", The Qualitative Report, 10(2):328-338.
藤沢三佳, 1995,「現代のシンボリック相互作用論者―A.ストラウス」船津衛・宝月誠編「シンボリック相互作用論の世界」恒星社厚生閣, 61～72頁.
James, W., 1907, Pragmatism.Cambrodge, MA: Harvard University Press, 桝田啓三郎訳, 1957,「プラグマティズム」岩波書店.
————, 1904 (1912), Essays in Radical Empiricism and Pluralistic Universe. Gloucester: Peter Smith, 伊藤邦武編訳, 2004,「純粋経験の哲学」岩波書店.
加藤一巳, 2003,「ミードにおける自然, 社会, 科学的方法」, 加藤一巳／宝月誠編訳「G.H.ミード プラグマティズムの展開」ミネルヴァ書房, 257～293頁.
木下康仁1999,「グラウンデッド・セオリー・アプローチ：質的研究の再生」弘文堂.
————, 2003,「グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践」弘文堂.
————, 2005,「分野別実践編　・アプローチ」弘文堂.
————, 2006,「グラウンデッド・セオリーと理論形成」社会学評論, 57(1)：58-73.
桑原司,「社会過程の社会学―ハーバード・ブルーマーのシンボリック相互作用論における社会観再考―」http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara.

Lave, J., & E.Wenger, 1991, Situated Leanibg: Legitimate Peripheral Participation, Cambridge: Cambridge University Press. 佐伯訳「状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加」産業図書, 1993.
Lewis J.D., 1976, "The Classic American Pragmatists as Forerunners to Symbolic Interactionism" The Sociological Quarterly, 17:347-359.
Lewis J & R.Smith (eds.):1980, American Sociology and Pragmatism: Mead, Chicago Sociology and Symbolic Interactionism. Chicago: University of Chicago Press.
Lincon, Y.S., & E.G.Guba, 1985, Naturalistic inquiry. Beverly Hills, CA:Sage.
Lovejoy, A., 1963, The Thirteen Pragmatisms. Baltimore: John Hopkins University Press.
Martin, J., 2006, "Reinterpreting Internalization and Agency through G.H.Mead's Perspectival Realism" Human Development 49:65-86.
McCracken, G., 1988, The Long Interview, Sage, Newbury Prak,CA.
McPhail, C., & C.Rexroat, 1979, "Mead vs.Blumer: The Divergent Methodologocal Perspectives of Social Behaviorism and Symbolic Interactionism", ASR, 44:449-467.
Mead, G.H., 1932, The Philosophy of the Present. Chicago: Open Court, 河村望訳, 2001,「現在の哲学・過去の本性」人間の科学社.
――――, 1934, Mind, Self and Society. Chicago: University of Chicago Press, 河村望訳1997,「精神・自我・社会」人間の科学社.
――――, 1936, Movements of Thought in the Nineteenth Century. Chicago: University of Chicago Press, 河村望訳, 2002,「十九世紀の思想運動」人間の科学社.
――――, 1938, The Philosophy of the Act. Chicago: University of Chicago Press.
――――, 1964, Selected Writing. George Herbert Mead. Edited by A.Reck.New York: Bobbs-Merrill, 加藤一已/宝月誠編訳, 2003,「G.H.ミード プラグマティズムの展開」ミネルヴァ書房.
Miller, W.L., & B.F.Crabtree, 1999, "Clinical Research: A maltimethod typology and qualitative roadmap", in B.F.Crabtree &, W.L.Miller (eds.), Doing Qualitative Reseach, Sage, Thousand Oaks. California, 3-30.
――――, 1999, "The Dance of Interpretation", in B.F.Crabtree &, W.L.Miller (eds.), Doing Qualitative Reseach, Sage, Thousand Oaks.California, 127-143.
Mills, J., A.Bonner, & K.Francis, 2006, "The Development of Constructivist Grounded Theory" International Journal of Qualitative Methods, 5(1):
Mills, M.B. & A.N.Huberman, 1994, Qualitative Data Analysis: An expanded sourcebook (2nd ed.) Sage, Newbury Prak,CA.
Moustakas, C., 1961, Loneliness. Englewood Cliffs, NJ.:Pretice-Hall.
――――, The touch of loneliness. Englewood Cliffs, NJ.:Pretice-Hall.
――――, 1990(a), Heuristic Reseach: Design, methodology and applications, Sage, Newbury Prak, CA.
――――, 1990(b), Heuristic Reseach: Design and methodology, Person-Centerd Review, 5(2):170-190.
――――, 1994, Phenomenological Research Methods, Sage, Thousand Oaks.California.
中野正大・宝月誠編, 2003,「シカゴ学派の社会学」世界思想社
長田攻一, 1983,「G.H.ミードの『社会的行動主義』についての一考察—パースペクティヴ論を中心として—」早稲田大学大学院文学研究科紀要, 29：43～57頁.
Packer, M.J., 1985, "Hermeneutic inquiry in the study of human conduct", American Psychologist, 40:1081-1093.
――――, 1989, "Tracing the Hermeneutic Circle: Articulating an ontical study of moral conflicts", in M.J.Packer &, R.B.Addison, (eds.) Entering the Circle, State University of New

York, Albany, N.Y., 95-117.
————, 1989, Packer M.J., & R.B.Addison, 1989, "Evaluating an interpretive account", in Packer M.J., & R.B.Addison (eds.), Entering the Circle: Hermeneutic investigation in psychology, Albany, State University of New York Press. 13-36.
————, 1991, "Interpreting Stories, Interpreting Lives: Narrative and Action in Moral Development REsearch", in M.B.Tappan & M.J.Packer (eds.), Narrative and Storytelling: Implication for Understanding Moral Development, New Directions for Child Development, 54:63-82.
————, 2000, "An Interpretive Methodology Applied to Existential Psychotherapy", Methods Annual Edition, 493-514.
Pandit, N.R., 1996, "The Creation of Theory: A Recent Applocation of the Grounded Theory Method", The Qualitative Report, 2(4).
Raskin, J.D., 2002, "Construction in Psychology: Personal Construct Psychology, Radical Constructivism, and Social Constructionism", in J.D.Raskin & S.K.Bridges (eds.) Studies in meaning: Exploring constructivist psychology, New York: Pace University Press, 1-25.
Rennie, D.L., 1998, "Grounded Theory Methodology: The Pressing Need for a Coherent Logic of Justification" Theory & Psychology, 8(1):101-119.
————, 2007, "Hermeneutics and Humanistic Psychology", The Humanistic Psychologist, 1:1-26.
Rennie, D.L., & K.D.Fergus, 2006, "Embodied Categorizing in the Grounded Theory Method", Theory & Psychology, 16(4):483-503.
Ryan, G.W., & H.R.Bernard,2003, "Techniques to Identify Themes", Field Methods, 15(1):85-109.
戈木クレイグヒル滋子, 2006,「グラウンデッド・セオリー・アプローチ：理論を生み出すまで」 新曜社
Schiller, F.C., 1912, Studies in Huumanism. London: Macmillan.
Schwandt, T.A., 1994, "Constructivist, Interpretivist Approach to Human Inquiry", in N.K.Denzin & Y.S.Lincoln (eds.) Handbook of Qualitative Research,Thousand Oaks, CA:Sage, 118-137.
Shalin, D.N., 1991, "The Pragmatic Origins of Symbolic Interactionism and the Crisis of Classical Science" Studies in Symbolic Interaction, 12:223-251.
Strauss, A.L., 1993, Continual Permutations of Action. New York Aldine Transaction
Strauss, A.L. & J.Corbin, 1990, Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory. Thousand Oaks, California, Sage Publications, 1998, 操, 森岡訳「質的研究の基礎」, 1999, 医学書院.
————, 1994, "Grounded Theory Methodology," in N.K.Denzin, & Y.S.Lincoln, Handbook of Qualitative Research, Thousand Oaks, Sage Publications.
Strübing, J., 2007, "Research as Pragmatic Problemsolving: The Pragmatist Roots of Empirically-grounded Theorizing" in Bryant,A., & K.Charmaz, 2007, The SAGE Handbook of Grounded Theory. Los Angeles:SAGE. 580-601.
Thomas, W.I., 1951, Social Behavior and Personality. Social Science Research Council, New York.
徳川直人2006,「G.H.ミードの社会理論」東北大学出版会
戸田山和久, 2005,「科学哲学の冒険」日本放送出版協会
魚津郁夫, 2006,「プラグマティズムの思想」筑摩書房
Wenger, E., 1998, Communithies of Practice: Learning, Meaning,and Identity, Cambridge: Cambridge University Press.
Wenger, E., R.McDermott, & W.M.Snyder, 2002, Cultivating Communities of Prctice, Boston, MA.: Harvard Business Scool Press. 野中・桜井訳「コミュニティ・オブ・プラクティス」翔泳社